

R 4 全国安全週間パトロール

北九州東労働基準監督署

皆様ご安全に、北九州東労働基準監督署長の甲田と申します。

本日は、7/1から7/7までの期間で展開される全国安全週間の安全パトロールでお邪魔しております。

本年のスローガンは「安全は急がず焦らず怠らず」です。

安全最優先で作業を進め、リスクアセスメントと低減措置をしっかりと怠らず、事故を防止しましょう。

また、先週は連日危険な暑さの猛暑日が続きました、こまめな休憩・水分補給等熱中症対策も怠りなくお願いします。

せっかくの機会ですから現場のキーパーソンである職長の皆様に一言ご挨拶もかねて建設業の安全についてお話させていただきます。

我々労働基準監督官の願いは建設業従事者を含むすべての労働者が安全安心して就労できる職場環境の形成にほかなりません。

しかしながら、建設現場の職場環境は3Kと言われるほど他業種の職場環境とは未だ一線を画している状態であるのも事実であります。

なぜそうになってしまうのかは、足場上等の高所での作業がある、ドラグショベル・ダンプトラック・クレーン等の大型重量機械を使う、鉄筋・鉄骨等の重量物を運搬する等々様々なリスクを孕んでいる作業が他業種に比し圧倒的に多いためであります。問題は、これら作業こそが建設工事の作業であり、したがって、工法の進歩はあるにしても今後もこれら作業はなくなることはないということです。

このなくなるK（危険）をできるだけ事故には至らせない、つまり、建設業における労働災害の撲滅という命題を達成するため、我々並びに業界で働く皆様方と力を合わせ取り組む必要があるのです。

建設業界で働く方々は、同業・同僚の尊い人命とその家族の生活を守るため、3Kと呼ばれる業界のイメージを払拭し新たな世代の雇用を確保するため、今業界に属する一人一人が努力せねばならないということです。

さて、建設業の労働災害については長期的には減少傾向にあるものの、発生する災害は重篤なものとなり易いという特徴があります。それは休業災害に占める割合（全業種の10%）と死亡災害に占める割合（同33%）を比較すると明らかなおりで、そして現在、全国の死亡災害に占める割合は建設業が第1位で全体の3割を超える状況になっております。

当署管内においても同様の傾向でして、昨年はコロナを除く死傷災害が473件発生しており、そのうち建設業は約8%(36件)でしたが、死亡災害は2件発生した2件とも建設業でした。その前年令和2年についても死亡災害が2件発生しておりますが、2件とも建設業であったという状況でした。

この重篤な災害を他業種レベルに如何に減少させていくかということが命題であり、あきらめるわけにはいかない課題であるものです。

ゼロ災の鍵はリスクアセスメントにあります。

しかしながら、ややもすると安全衛生活動は形骸化しがちであることも事実です。

「自分の会社や共に作業する仲間から決して一人の犠牲者も出さない」そういう不退転の決意を持ち①基本を忘れず②常に初心に立ち返り③真摯に取り組む これがなければ、建設業でのゼロ災の達成は、望むべくもありません。

様々な工程の中で刻々と変わる現場の状況に対応しリスクの低減を図らねば、到底達成できるものではないということです。

一つ事故事例を紹介します。

(事故事例割愛)

私がここで言いたいのは、リスクを見つける目の大切さ、そしてそれは現場経験を積めば必ずしも自然と向上するとは限らないということです。

もう一つ事例を紹介します。

(事故事例割愛)

ここで私が言いたいのは、リスクを見つけたならその低減措置を実行しなければ事故につながる可能性は防止できないということです。

リスクを無視したり過小評価することの危険さ、無理することの危うさを改めて認識してください。

現場で作業する人は①基本を忘れず②初心に立ち返り③真摯にリスクについてのアンテナを常に張ってください。

そしてリスクがあると思ったら、自己判断での無理は禁物です。なんとかなるだろうと思い発生した災害は数え切れません。

皆様方職長等と検討しリスクの低減措置を図って作業を進めることが肝要なのです。

職長は自分が災害防止のキーパーソンであるとの自覚をもって過去の事故事例等を多く学びリスクを見つける目を養ってください。

他の職種のごことは他の職種の業者が考えるんじゃなくて、職長会で皆様方職長全員で検討してください。

それが慣れによるリスクの見落としを防止することとなります。

また、元請けから提供される情報や厚労省の「職場の安全サイト」などに積極的に接し、自分なりにリスクはどこにあったのか、どうリスクを低減すべきであったのかなど 考えスキルを上げていくことも大切です。

皆様方と我々の共通する目的を達成するため、最後に無災害を達成したと傍らの人と肩をたたきあえるため、ご尽力をお願いします。

最後に本工事が無災害で終始すること及び今後の皆様方の事業での無災害を祈念し、指差し呼称で締めたいと思います。

「ゼロ災で行こうよし！！」